



天窪 雪路

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

傘

【Nコード】

N8653P

【作者名】

天窪 雪路

【あらすじ】

僕はそれでも出かけなければならない。

朝目覚めると雨が降っていた。僕の予想していた朝の景色はそこに
なく、太陽の温もりもなく、鳥のさえずりもなく、もちろん青空に
浮かぶ真っ白な雲も存在していなかった。

僕はそれでも出かけなければならない。

期待した朝がそこになればそれはそれでいい。機械的に今日の日
を過ごし、やがて訪れるだろう清々しき朝の目覚めを待てば良い。

バスルームに行き、いつものように電気シェーバーで髭を剃った。
チューブを搾り歯みがき粉を2cmほど歯ブラシに乗せ、それをく
わえてシャワーを浴びた。そこまでしてようやく朝の目覚め方がそ
れほど重要なことではなかったと思った。晴れの日があれば雨の日
もある。

目覚めたばかりの朝には朝がすべてである。それだけのことだ。

ところで昼過ぎになって、僕は雨の中へと出かけた。

目の前の横断歩道を信号が赤になる前に渡れるかどうかと思ってい
たら、青信号が点滅し始めた。僕はそれに気付いて歩のスピードを
緩めた。最近、そういう時にはいつもそうだ。僕の前を歩いていた
三人組の若い女の子たちは青信号が点滅するやいなや奇抜な形をし
た靴の踵をコツコツと鳴らしながら走って行った。

僕と僕よりもひとまわりほど年上の男とが赤信号をぼんやりと眺め
ながら再び歩を進める時を待っていた。

いつの間にか僕の後ろで初老の男が傘を差していた。僕の右手では二人組の女子高生がずぶ濡れになって自転車に乗っていた。皆、赤信号をぼんやりと眺めていた。

「私にも娘がいてね。大学生の娘たちなんだ」
初老の男が二人組の女子高生の頭の上に傘を差してやっていた。

信号は青に変わり、女子高生たちは初老の男に礼を言い、やはり降り続ける雨の中へと走り去って行った。

僕は僕よりもひとまわりほど年上の男と初老の男と共にゆっくりと横断歩道を渡った。

その中でやがて僕だけが先へと歩を進めていた。

雨はまだ降り続けている。

いつ止むとも知れぬそんな雨音を聞きながら、僕は長いとも短いとも思えた今日一日についてものを思う。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8653p/>

傘

2011年1月9日05時41分発行